

# 私と片付け

山本秀子

この題を前にして、昨年私の組を都合で一日だけ、先輩の先生にもっていただいた後で、「体操の後、歩いて砂場に入っただけの片付けはやるけれど、お弁当の前のお片付けはしないのよ……。形式的というか、一斉的というか……。」といわれたことを思い出し、改めて私と片付け、いえ私と生活、私と保育を考えていきたいと思う。

私はいろいろなものを、片付けると称してしまいこんでしまい、頭の中のことを書きとめ、きちんとしないと気がすまない性分である。でもそれがすむと自分自身、次をどうしてよいかわからなくなり、それをみつめるため、またひっくり返していることがある。また現在、縁あって、今まで他人であった主人と生活を共にしてみると、およそ「気持ちがよく」「気がすむ」という感覚のズレを感じるのである。たとえばものの置き方一つでもそうだし、片付けにとりかかると

も違う。片や、やりながら考えもし、片付けもし、ものごとの終了とともに片付けも終わる。片や、頭の中であれこれ試行錯誤をつくしてから、間際に行動する。どちらも次の行動には間にあうのだが何とも歯がゆかったりである。

そんな繰返しの中から、片付けは片付けのための片付けではなく、人と人が生活するため、生活流を揺り動かしていくためにするのはないかと思ひ、雑然としているようにも、そこに住む人にとってあるべき場にそのものがあるようにすることや、片付け終わったと思う時に次へのつながりがついている（何か一つ出ているなど）というふうに片付け感覚が変わってきた。そして散らかって仕方がないということは、生活を固定することなく、次が出てくる可能性を多分に含んでいるとも思ひ、散らかすメンバーが多いことを羨しくさえ思う。また以前に先輩の先生に「毎日、個人記録をつけ

ていくより、あなたはそのエネルギーをもっと子どもとの場にぶつけなさい」といわれた意味が、今おぼろげにわかってきた気がする。「幼稚園の先生の上は、きちんとしまいきむでなく、すぐ仕事ができるようになっていなくては」といわれたことも。

幼稚園の五月ごろ。子どもも園生活に慣れてくると「バクハツ」といって積み木をガラガラこわしたり「おひっこし」といってありったけのおもちゃを運んでゴチャゴチャにすることが出てくる。そんな時、お手伝いさんになって仲間に入り、片付けたりして、子どもがまたそこから考えて次の生活がつくれるようふるまう。形をきれいにするだけでなく、一つこわれたらバツとやめてしまうのでなく、じっくり考えていけるよう、先生が率先してあそび出したりもする。私などはこんな時どうしてよいかわからず手を出さないでいたり、出ていっても子どもぬきの形のみを片付けをし、子どもの意欲をそいでしまう失敗を何度もしてきた。おもちゃが落ちていれば拾いながら通りぬけたりなど、先生のふるまいとかもし出すふん囲気とで、子どもが自分の行動体系にとりいれていけるよう助けていく。さらに子ども自身が気持ちのよいことは先生も気持ちがいんだというつながり、共感が片付け

の根本にもなるし、大切な幼児教育でもあると思う。

「お片付けつけてなに？」という四月の子どもを前に、先生が全部片付けるくらいから始まり、「積み木屋さんはいないかしら」と声をかけ、自分からしてくれる人をふやし、お片付けをルートにのせていく。保育後にも子どもとの生活を考えての大人の片付けがある。その繰返し子が子どもに伝わり、いわなくても先生のしていたとおり戻してくれたり、大切なおだんごをそっとすみに片付けたり、というほほえましい片付けにつながっていく。子どもを忘れた大人だけの気持ちのよさで片付けたり、おしつけ的な言葉やふるまいで動いた結果が、冒頭の「自分から片付ける気持ちが育っていない」という言葉として出てきた気がする。

子どもがあそんでいる中にも「ルートにのったあそび方」として片付けの指導が含まれ、次の行動に移る区切りにも片付けがある。ともに子どもと大人がじっくりと次を考え、自分から動いていく生活をつくるためのよいチャンスであり、幼児教育のすべてにつながる大切な部分であると思う。

(もと お茶の水幼稚園)